

G. Stanley Hall: The Psychologist as Prophet

By Dorothy Ross

Reviewed by David Elkind in "Harvard Educational Review"

August, 1973, Volume 43, Number 3.

江波 諄 子

児童研究をする若い人にとって、今日、ピアジェの名前は鮮明であっても、スタンレー・ホールの名はしだいに遠ざかり、歴史の中にその名をとどめているだけにすぎないかもしれません。また、実際、同時代に活躍している人でないと、現在の研究の渦中でエネルギーを出しきっている若い研究者は、過去の偉大なる研究者の研究内容、彼の主張などを詳しく理解しようとする意欲まで、普通は力が及ばないものです。こんな後継の研究者たちに紙上において、ホールを再生させてくれた著者に感謝しなくてはならない。

ホールを知るにあたって、過去に出版された彼自身による二冊の書物と Pruette (1926) や Starbuck (1925) によるものが参考となるが、今回は、ホールに直接触れていない Dorothy Ross により、その後の新しい児童研究の波がおこった後によりがえらされたという点に、今までのものと異った意味があるように思う。

スタンレー・ホールは、今世紀の初めに米国における児童心理学を創設した人だとはしばしばいわれます。彼は、フロイドをアメリカへつれてきたことでもよく知られ、また、青年期についての研究者としても知られています。

「ホールを知る人にとって、その性格の明けつびろげなことに、息込み、底知らずの知的熱心さが、いかに多くの人を刺激したかという点で彼は重要でもありません。たとえまじがったことをいったとしても。にもかかわらず、彼のいったことばは、聴衆や学生を奮い立たせ、研究のために現場や研究室や図書館へ向かわしめたものでした」

さて、なるべく詳しく本文を要訳してみますと、一八九〇年代にアメリカにおこった最初の児童研究の動きは、現在の動きと同様に急速な社会変化の中に台頭し、社会改革の中で人間の精神というものに関心をいだきはじめた時でした。当時は、教育は公の責任であり、家族や教会の責任ではないという考えがアメリカの都市社会にありました。そのころは、ダーウィンや、H・スペンサーなどが公教育思想のもとになっていたわけです。児童研究は、児童の本質にあうようなカリキュラムや教授をするために、子どもをもっとよく知る手段として出現したのでした。現在の児童研究も、教育革命が叫ばれるころになって、ピアジェの研究などに始まりました。ですからピアジェの研究は、今日の児童研究の主要な原動力になっているという点で、価値があるわけです。スタンレー・ホールとピアジェは、こ

の点において似ているわけですが、ホールの生活や仕事はいきあたりが多く、ピアジェの研究の特色である首尾一貫性に欠けることがあげられます。

「ホールは大変な雄弁家で、彼のアイデアとともに、その熱心さ、雄弁術で聴衆を魅了しました。実際、彼のいうことはよく矛盾して、教育学上の意味をなさないものがありました。それに比べて、ピアジェはその独創性や流ちょうなアイデアや器用さで聴衆を揺り動かす学者です。そして、もし何かつじつまのあわない所があっても、それはピアジェの仕事そのものでなく、それらを理解する人の側の解釈の相違ということになっています」

それでは、著者がスタンレー・ホールの再発見を主張している理由をさらに説明してみましよう。

「今日の児童研究の動きは、全く初期のころと同じような葛藤を示し、ゆきすぎに悩み、文化の抵抗や圧力に直面しているからです。ホールは、当時、単に児童研究の動きを鼓舞し、方向づけたというだけでなく、ゆがみや危険な教育実践が行われているのを鎮めるのにも役立ったからです」

ホールは、他の誰よりも児童研究は成功するためにはど

こへ行かねばならないか、また、どうして彼の時代にはそこへ行きつくことができなかったか知っていました。つまり、彼の時代と同様、今日的にも、ホルルの生活と仕事は意味をもっている。これが、予言者としてのS・ホールと著者が名づけた所以でしょうと、エルカインドは記しています。

スタンレー・ホール自身について書くことは大変むずかしいことだといえます。それは彼の性格によるようです。

彼は人と直面している時は対決するのがきらいでしたので人に同調し、後になってその人がいなくなつてから、そのことについて厳しい批判をしたといわれます。彼の知的な熱心さ以上に、内面的な人間関係の複雑さがホルルを描写することをむずかしくしたようです。

ホールは、マサチューセツチュー州のアシュフィールドという所で、農村の少年として育ちました。後にウィリアムズ・カレッジからユニオン神学校へ進み、当時、頭のよい息子をもった、つつましい家庭の親の多くが願つたように、彼の両親は、彼を牧師にしたかったわけです。しかし、ホールは神学より哲学に興味を覚え、その才能を認められ、哲学の本場であるドイツへ、三年間の遊学の機会を

得ました。彼は、ニューヨークへもどつて負債を返すために、十八ヵ月間、家庭教師をしましたが、一八七二年にアントイオ・カレッジに職を得、そこで四年間、おもに言語についての講義をしました。彼はこの間、さまざまな活動に従事し、後の彼の講演者としての才能を十分に実らせたのです。彼は、書物の上でヴントらに影響されて、生理学的心理学について、さらに勉強するために、再びドイツ行きを考えます。しかし、ちょうどそのころ、ハーバードから英語の講座を受けよう依頼があり、これを受けました。ホールは、やがて哲学科へ移れる希望をつないでいたのですが、それもなかなか実現せず、英語の試験の採点にもあきてしまいました。この間に、ホールは生理学研究室で勉強し、ウィリアム・ジュームズの許でアメリカで最初の心理学の博士号を得ました。

ハーバードを去つた後、ホールはドイツへ行つてヴントやヘルムホルツやフエヒナーとともに研究しました。ホールは、ダーウィンの進化論から出た新生態学ことに熱心しました。二年の滞欧後、帰国しましたが、経済的に苦しくなり、ハーバードの総長C・M・エリオットからの教育学についての講演をして歩かないかの申し出を受けまし

た。講演は好評でした。一八八一年、ホールはジョンズ・ホプキンス大学に心理学と教育学の職を得ました。彼はそこで心理学研究室をつくりました。この時代のホールの門下生は、ウッドロー・ウィルソンやジョン・デューイです。ホールはホプキンス大学で、彼の意志通りいかなくなるかと、マサチューセッツ州のクラーク大学の学長の地位を受けて移りました。この大学は、一八八九年の秋に開学しましたが、開学直後から経営面で難問にぶつかりました。

しかし、ホールはこのまま一九二一年の定年退職まで学長として残りました。そして、第一代に引き続き、第二代のAPPA（アメリカ心理学協会）の会長に選ばれた直後の一九二四年に、彼はこの世を去ったのです。

ロス博士は、ホールの職業上の履歴については非常によく描写しているが、人間としてのホールには、あまり触れていないことをエルカインドは指摘しています。そして、ホールの教え子であったブリュエットによる、“GS Hall”には、彼の人間性が細かく描写されているのと対照的であるという。ホールは私的な生活の上で、実際に不幸な目にあっています。それは、彼が療養中で家に不在の時に、妻と娘を事故で失ったことです。その後十年して彼は再婚す

るが、一年もたたないうちに、彼の二度目の妻は精神病の症状をあらわしました。彼はこの驚きに耐え、辛抱強く重荷を背負うのです。

ではあるが、ロス博士の描くホールを読み続けると、しだいにホールを個人として、児童研究の創始者として、多大な業績をあげたことを理解するようになります。児童研究は一八九〇年代のアメリカ社会の特色でした。知的な關心への広がりや、社会改革のすざましい流れの一部だったのです。教育面で、ダーウィンの進化論を教育に持ちこんだ、H・スペンサーは教育の目的は「完全なる生活をわれわれに準備することである」といった。「完全なる生活とは、いわゆる人生のよりすばらしいことである」という。しかし、スペンサーはアメリカへ来て、アメリカの教育が全く彼の理想とはちがっていたことを発見するのです。このスペンサーの教育哲学は、後にホールの教育信念の系統に中心的な流れとなります。ことにホールは、スペンサーや生物学者のヘッケルらによって提出された説（個体発生は系統発生をくり返す）に共鳴しました。たとえば、ホールは彼の宗教発達の中で、子どもはアニミスティック、迷信的、自然崇拜から始まって、四、五歳になって架空の世

界に漂い、児童期中ごろになって多神論の段階に移るといっています。そして、宗教信念の道徳的倫理に気づくのは、青年期に入ってからといっています。彼の信ずるこの再現説は、まちがっているとなりましたが、ホールは教育に発生的な発達の見解を持ちこんだという点で積極的に貢献したことになります。

もし、子どもの心が年齢とともに進化するのなら、教育はさまざまな精神進化の段階に適應しなくてはならない。もし学校がそれをやっていないのなら、われわれは知能の発達について知る必要がある。これが、最初の児童研究の動きの目的であり、ホールは、多くの質問紙により研究をし、子どもの本質をとらえる情報を得ようと試みたのでした。教育面での児童研究は、カリキュラム以上に及びました。ホールは、教育の科学化の必要性を感じし、職業人として教師を訓練することを主張しました。これは、ピアジエが一九七〇年に同じ方向でいった事の前兆になります。質問紙によって広範囲な個人差が現われ、これによって、さらに教授法は集団として子どもと同様、個人としての子どもに適するものでなければならぬことが明らかにになりました。彼の広い心理学の概念と同様、教育面でも、ホー

ルは非常に近代的で、かなり当時を先行していたといえるでしょう。

このように、児童研究への関心が高まったのにもかかわらず、一九一一年以後、児童研究はきらわれ始めました。この理由は大変重要だといえます。つまり、そのひとつとしてロス博士が指摘しているのは、心理学者と教育者間のルーズな結びつきです。教育者は心理学者のむずかしいことを批判し、心理学者は、教育者のナイーブで子どもについてロマンティックな概念をもっていることを批判しました。事態はアメリカの心理学がその哲学から割れはじめ、心理学はそれが科学であることを証明しなくてはならなくなったのです。この葛藤の他にも別の要素が、児童研究の衰退の原因となりました。つまり、児童研究の動きの中で、その中に意味されていないゴールや目的を自分勝手に解釈する人があらわれ、その人たちは、子ども中心の信念からほど遠い教え方を、児童研究という名のものでしたのです。その上、子ども中心哲学を理解した先生の幾人かも極端に走ったり、両親や社会を忘れて、子どものニードや興味ばかりにこだわっていました。

まだ原因はあります。それは、児童研究の哲学がアメリ

カの文化の氣質に対立したのです。当時の児童研究は発生的な心理で育ちうる教育改革を考えに入れることに限界がありました。アチーブメントは、能力でなく、モチベーションが大切であると信じられている社会に、九十九パーセントがパースペリション(汗)で、一パーセントがインスピレーションで、意志さえあれば成功する方法があると信じられている社会に、生物学的な見方はうまくあてはまりませんでした。ホールは、いかに発生的な見方が心理学者や教師にとって魅力のないものかびつくりしました。児童研究の動きの中で、発生的な考えは一度は理解されることまでできたが、それは伝統的なアメリカのプラグマティズムや楽観主義と衝突してしまったのです。しかし、それにもかかわらず、これまでの児童研究の動きは別の意味で業績を残しました。それは、教育心理学の分野を正統化したことであります。ソーンダイクと彼の教え子たちはその方面で活躍しました。教育心理はあまりに科学的で結果的には方法論の問題におちいり、真に迫る実際の教育問題を無視しているといわれるようになったが、ともかく教育心理はその始まりを少なくとも児童研究の動きに負っているのです。ホールの健康や栄養への興味は、学校の

生徒を定期的に身体検査することになり、彼の青年期への興味は、高校の生徒を職業と進学方面へと分けて教育するのに役立ちました。

初期の児童研究の動きとして強調されるべき面は、前記したように、ホールが子どもの発達には、教師の訓練が根本的に大切であると主張したことであり、ピアジェも同様のことを強調しましたが、ホールはピアジェのように *Hierarchy* もつくらなかったし、反対する心理学者は、もし教師が児童発達の専門家になるのなら訓練も必要だろうが、といって、現在の段階ではそこまですることは年をのばしすぎると感じました。ホールは、教育専門家が教師を訓練するということにおいて、心理学者と仕事をわかち合うのをきらっているという事実を頭に入れていなかったのです。多くの方面で革新の教育の動きは成功したが、それはただ機構をちょっと動かしただけで、人々に変化するところまでは至りませんでした。全く同じドラマが今日もくり返されています。学校体系は夏の教育変化がもたらす効果を期待して、カリキュラムやクラスルーム機構を改革してみたが、実は、夏の教育改革は子どもに教育にたずさわっている人々の態度そのものに本物の変化が

おこった時に來ることでしょう。子ども中心やオープンクラスルームを志しているいくつかの近代的なクラスルームで、確かに机は取り去られ、興味の分野がおかれたがふん囲気や教師は以前と全く同じです。同じくいわゆる多くのピアジェ理論に基づくカリキュラムも、ピアジェの教育理論とは関係が薄いようです。

実際、商業的につくられた教材は教師や子どもが創造する機会や経験を奪うし、教室でつかわれる教材を創るのは、今も昔も児童研究哲学を履行するための根本であるのです。しかしながら、今日ではピアジェの発達心理に基いている児童研究も、その生物学的、発生的根拠に対して、ホルルの時代ほど強くないが、アメリカ人の反感をかい始めました。つまり、もし、発達に段階があるとしたら、われわれは子どもをもっと早くそのステージを通すことができるか。もし、一時間でできるのなら、なぜ同じことを三〇分できないのだろうと考えるアメリカ人の疑問に、生物学的限界の概念、いやどんな種の限界もぶつかり合わなければならぬのです。ですから、ちょうど昔の児童研究の動きがワトソンの行動主義に向かったと同様に、今日の児童研究がその地盤を行動治療にひらいているのは

驚くまでもないでしょう。実情を知り、ホルルは児童研究から去り、別の分野で発生的アプローチを支持しました。

年をとるに従い、ホルルは自己における年齢の過程を発生的心理学者の目でみつめました。そして *Genecourse*

(老朽) (1922) という書物を出しました。ホルルの老朽の研究は、この問題における現代の興味を前兆しているといえます。それでは、今日に役にたつことが、ホルルの研究経験からあったのでしょうか。「ある」と著者はいいます。

ホルルが発見したものの、彼がきらめたことは、発生的見方をアメリカの教育や心理にもってくることの困難でありました。今日、発生的見解をとる人でさえも、時々それに反するプラグマティズムや経験主義を現わします。深く十分文化に浸透している哲学から抜け出せることはむずかしいことであると著者は語る。多分、ホルルのいわんとしていた所は、発達学的な見方を得るまでには時間がかかる。ただし、一旦そのような見方が確立されると、それは人の実生活の面でも職業面でもすべての面に浸透するものだという事ではないだろうかと結んでいます。

広く長く大きな目で、再び子どもの研究にとり組まねばならないことを痛感します。(十文字学園女子短期大学)